

主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力育成 附属中学2年生における物語画「宮沢賢治作『おきなくさ』」制作、想像画「マイスペースの物語」制作、想像画「夢の色模様」
(学生作品)鑑賞の実践を通して

立原慶一

本研究では、表現と鑑賞の相互スパイラル運動効果を目論むという、大枠としての方法論的仮説の有効性が実践的に検証される。相互スパイラルとは互いに作用しあって、活動内容が充実、向上するということの謂いである。その一環としての本稿は、一連の「主題表現法に導かれた自分たちの作品」を質問紙法によって時間経過的に鑑賞及び評価するならば、当該能力が効果的に育成されるという、能力育成論的な仮説を研究対象に据える。それは証明しやすいように、大枠としてのあり方から、より具体的な形に変形されている。

そのための端緒として、題材の配列法が異なる二種類の実践を宮城教育大学附属中学校2年生、4クラス148名に対して週時的に行うことにする。その際、まず生徒の鑑賞及び評価能力が如実に現れてくるような、質問項目を考案し設定する。次に、その質問紙に対する全回答内容と対話しながら、一方で評価内容の拡がりを調べるべく「項目別化法」、他方でその深まりを探るべく「評定基準化法」という、二つの分析方法で明らかにしてみることにする。

<題材実践その1>では、文を絵にするという造形活動を原則とするため、必然的に再現的具象的な画像が要請された。生徒は視覚的イリュージョンの実現を図るべく、モチーフ・情景の選定及び性格づけの仕方と描写・彩色法に依存した。作品の美的判断においても、それらの表し方のもたらす表現効果が、主に生徒の価値意識によって見極められた。しかし空間構成法や構図法などの表現方法は、評価対象もしくは項目とはなりにくい事態が判明した。

それに対して<題材実践その2>では、コラージュによる技法が制作の条件とされているため、切り取られた映像の形としてあるモチーフ・情景の選定法、及び合成による性格づけの仕方が要請される。それは「モチーフ・情景の選定及び性格づけの仕方」のコラージュ技法版に他ならない。それらの調和的な合成法によって、自己世界の意味づけを目指すことが基本的な活動内容となる。その題材では次の傾向が窺われた。

作品の価値判断において、主題感受以外に評価内容の項目別化が七つに及ぶなど表現方法の範囲が幅広く認識され、主題表現法上の効果が項目ごとに、価値意識を働かせることによって確かめられた事態である。教育課程論的な知見としては以下の事柄が導き出された。

<題材実践その3>想像画「夢の色模様」(学生作品)の鑑賞及び評価では、<題材実践その1>の経験者である「おきなくさ組」は、描写・彩色法がもたらす表現効果を主に自覚した。それに対して<題材実践その2>の経験者である、「マイスペースの物語組」は描写・彩色法はもとより空間構成法など、表現方法をめぐる創意・工夫のありようを幅広く認識した。それは自己世界の意味づけや事象の変化、画像が放つ造形力学の表現をめぐってなされるのである。

三つの題材実践を通して、第一に「主題表現法に導かれた自分たちの作品」を質問紙法に基づきつつ週時的に鑑賞及び評価するならば、当該能力を効果的に育成できるという、能力育成論的な仮説の有効性が検証された。第二に教育課程論的な知見としては、二つの題材実践を通して「想像画＋想像画鑑賞」の方が、「物語画＋想像画鑑賞」より全体的主題をより多く把握しえると同時に、表現方法に関して見方を深めることができた。かくて題材配列としての望ましい教育的特質の局面並びに、一段と高い有効度が明らかとなった。第三に題材論的知見として得られたのは、題材の構成についてである。掘り起こされるべき主題の性格については、一人称的な造形表現を趣旨とすること。技術のそれについては空間構成法を多様に試したり、その意味を突き止めたりすることのできる題材の方が、教育的な意義が大きいという事態である。